

# 随想 「甘え」が日本を滅ぼす どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

## 第12回 日本はリーダー嫌悪社会 (1)

### 1. リーダー嫌悪社会

今はリーダー待望論が日本中を覆っている。なぜ日本に強いリーダーがでないのか、そのイライラが募り、閉塞感だけが日本全体を覆っているようだ。ところが日本人は本来強いリーダーが大嫌いなのだ。大嫌いなのに待望する。それが今の日本の悲劇であり喜劇だ。

ムラ社会はリーダーを必要としない。異民族の侵入のない平和で「もたれあい」の社会だからだ。ムラの住人から見れば、リーダーは本来居てくれればそれで十分。あとは下に任せてくれるのが理想的なリーダーだ。リーダーは調整型で十分なのだ。

他方、大陸諸国は日本とは事情が全く異なる。リーダーは異民族に進入されたときに一族を率いて生き延びる道を見出さなければならぬ。失敗すれば民族滅亡だ。優れたリーダーを選び育て、いざという時にはそのリーダーに従って生き延びる必要がある。調整だけのリーダーでは滅ぼされて地球上から消えてしまうのだ。

日本のリーダー不在社会は、ムラの原理から来る日本独特のものなのだ。

### 2. 日本人は説得されるのが嫌い

強いリーダーは、まず自ら決断し、それがなぜ正しいか皆に理解させ、ついてきてもらう必要がある。説得と言う過程が重要であり、説得能力が必須となる。

問題は、日本人は説得されるのが大嫌いだということだ。自分が反対の考えをもっている時、説得されようということは自分の考えを180度変えなければならぬ。それはとんでもないことなのだ。調整なら相手にも90度変更させ、自分の変更が90度くらいですむ。それなら自分の自尊心も傷つかない。調整ということは、みんなで傷つく量を分担しあうメカニズムだ。甘いあいのメカニズムと言ってもよい。

大陸諸国は、このように甘えでいられなかった。調整だけをしていたのでは敵に負けて滅亡しかねない。普段から優れたリーダーを養成し、いざとなればそのリーダーに全面的に従わなければならぬ。従わせるためのリーダーの説得力が重視されるのは当然だ。

説得力は弁論能力を意味するのだが、説得されることが嫌いな日本人は当然反論する。「それでは、口先だけの人間がリーダーになってしまわないか」と。しかし、口先だけか、内容

があるかは聴く人が判断すればいいではないか。大陸人は的確に判断できるよう努力しているし、多くの場合、それに成功している。日本人だけがその能力に欠けているとは思えないのだが。

さらに反論される。「口下手だが能力ある人間もたくさんいるのではないか。説得力を強調すると本当に能力ある者を失ってしまうのではないか」と。この論理が正しければ、日本はリーダー不在で悩むことはない。弁舌を要求するヨーロッパこそ口先だけのリーダーがはびこり、リーダー不在で悩んでいるはずだ。ところが事実とは全く逆だ。

欧米では弁論能力はリーダーの必須だ。口下手でもリーダーになろうとする者は必死で努力をする。イギリスをナチスの猛攻から守った首相チャーチルはドモリで演説が苦手だった。しかし彼は努力した。演説の前には鏡の前で何回も練習したという。アメリカのニクソン大統領も演説は苦手。そのため、いつも暗いイメージが付きまとい、それにより彼はどれだけ損をしたことか。

大陸諸国では、リーダーの説得力は絶対なのだ。ところが、日本では、そのような意識は無いので、日本の政治家の説得力

力は低い。低いというより説得すること自体をはじめから放棄している。本稿の第10回で、日本は近い将来財政破綻することは必定と言うことと、それを防ぐには最低限消費税を20%程度にする必要があることは説明した。

ところが、日本のリーダーはこのことを国民に「説得」できない。EU諸国は、どこも国民を説得し、20%程度の付加価値税を有している。日本だけが駄目なのだ。

「説得」を抜きにして、ひとこと消費税の増税を口ばししてしまつた管政権は2010年夏の参議院選挙で民主党大敗を招いてしまつた。

### 3. 足引つ張りの文化

日本では、決断してそれを説得しようとするとは反発される。しかもそれは議論で応酬されるのではなく、小さなミスを徹底的に追及されたり、スキャンダルを探しだされたりする。要するに、正面切つた議論でなく、徹底的に足を引つ張られるのだ。

ここでも、日本人が本格的な議論ができないという欠点が表面化する。議論でことを解決するのでなく、足を引つ張るのだ。日本人は強いリーダーを求めながら、実は強いリーダーが大嫌

いなのだ。そのため、ことあるごとに足を引つ張る。

日本の足引つ張りは仲間内からのものが最も強力という特徴をもつ。平等を強く志向する日本人の社会では、同僚からリーダーが出ることで自分が気に入らないのだ。そのため仲間内のリーダーの足をとことん引つ張る。その結果、本来は支援してくれるはずの同僚から最も激しく足を引つ張られることになる。

自民党政権時代の「首相おろし」は日本の年中行事だつた。とにかく首相は長続きしない。1年を超えることが難しかった。しかし、政権が民主党に変わつてもそれは変わらないようだ。同じ日本人なのだから当然といえは当然なのだが。

自民党も民主党も、自分たちで選んだ自分たちのリーダーだから、支援し守り抜こうとすべからずだが、その意欲は極めて希薄だ。逆にチャンスさえあれば足を引つ張ろうとする。その時のエネルギーは猛烈だ。日本人は正面切つた競争は避けたがるが、マイナスの競争である足引つ張りに対しては極めて熱心だ。

この足引つ張りは政界だけではない。日本人のいるところ、どこでも起こりうる現象なのだ。

### 4. 人の功績を認めることが大嫌い

強いリーダーを認めたくないというエネルギーはリーダーの偉業も過小評価しようとする。最近の強いリーダーは小泉首相だ。しかし、しかし彼に対する評価は低い。郵政民営化は財政改革の第一歩で次のステップが必要だつたはずだが、自民党内の後継者でさえ郵政民営化を評価しさらに前進させようとはしなかつた。評価よりケチをつけたい意識の方が先行していたようだ。

さらに、彼の偉業の中で際立つのは拉致問題だ。拉致被害者を取り返しに政府専用機でピョニヤンに乗り込んだのは見事だつた。そのようなことができる首相は日本にはいなかったし今後もなかなか出ないであろう。まさに、日本人離れた快挙であつた。

ところがその偉業は、ほとんど評価されていない。評価どころかケチをつけるばかりである。「なんで全員連れてこなかったのだ。あれなら俺でもできる」と騒いだ政治家もいた。そのようなことを口走るのには最も無能な政治家で、ピョニヤンに乗り込むなど逆立ちをしてもできないタイプなのだが、それでもケチはつけられるのだ。「その通り」

という賛同者が多数なのも日本社会の特徴である。

偉業は偉業で評価できないと後続のリーダーは、ばかばかしくてリスクを負うような行動はとらなくなる。その結果、ますます強いリーダーは出てこなくなるのだ。

### 5. リーダーを見出し育てるシステム

強いリーダーをもつためには、有能なリーダーを見出し育てるシステムが必要だ。強いリーダーをもつ社会は、そのシステムが備わっている。日本に強いリーダーがいけないということは、そのシステムが存在しないことを意味する。次回は、そのシステムについて、論じよう。



金子博人  
(かねこ ひろひと)

金子博人法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)修了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFITA)会員。大東文化大学法科大学院。日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本ブライムリアルティ投資法人執行役員。



## 金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。